

# 琉球大学アドミッションセンターが進める高大接続事業

——北米・ハワイ調査の知見をふまえて——

山田 恭子, 保坂 雅子, 盛山 泰秀, 山田 美都雄, 天野 智水, 鹿内 健志, 高山 千利,  
多和田 実, 山城 新 (琉球大学)

本調査は、新しい入試のためのベースとなる情報収集を行うために実施した。調査は、アメリカ合衆国（北米大陸とハワイ州）において、大学のアドミッションオフィサーやリクルーターを中心にインタビュー形式で行い、入学者選抜の方法・業務、高大接続事業の実態を聞き取った。その結果を踏まえ、本稿では、今後琉球大学で行うべき高大接続事業を検討している。検討を通して生まれたアイデアのうち、高大接続プログラムの一環として、実現しつつあるものを中心に紹介する。

## 1 はじめに

中央教育審議会（2014）による答申以降、各大学において様々な高大接続改革が行われている。琉球大学アドミッションセンターでは、多面的・総合的評価方法の開発と高大接続事業の推進のための情報収集を行うために、アメリカ合衆国において、実際に入学者選抜業務に関わっているアドミッションオフィサーと高等学校と大学をつなぐリクルーターに対してインタビュー形式の調査を行った。アメリカ合衆国で調査を行うこととしたのは、シンプルな方法を工夫しながら、長年志願者を多面的・総合的に評価し、入学を許可しているためである。このような海外における調査は近年盛んに行われており（e.g., 川嶋ほか, 2017）、海外における入学者選抜の方法の特徴も広く知られるようになってきている。本報告では、まず、近年行われている調査も踏まえながら、入学者選抜の方法を簡潔にまとめた。次に調査を行った各大学が行っている高大接続事業、高等学校が行っている指導の内容をまとめた。その内容を琉球大学の高大接続改革にどのように活かしていくかを、平成 30 年度から実施予定の高大接続のための新しいプログラムを中心に述べていく。高大接続のための新しいプログラムを中心に述べることとしたのは、これらのプログラムを通して高等学校としっかりとしたつながりを作り、スムーズな情報交換ができるようにすることが、多面的・総合的評価を中心とした入学者選抜改革のベースとなると考えたためである。

## 2 アメリカ合衆国における入学者選抜の概要

アメリカ合衆国における入学者選抜は、大学によって多少異なるものの、主に外部の標準学力テスト

（ACT, SAT）、GPA、エッセイ、推薦書、調査書、課外活動の記録等の資料を用いて実施されている。これらの資料を大学のアドミッションオフィサーが評価する。外部の標準学力テストは、高校で習得した内容等を評価するために用いられる。GPA は4年間の GPA 全てを提出することが多く、その推移も評価の対象となる場合が多い。なお、大学のレベルごとに必要となる GPA の目安は公表されている。

学力以外の側面はエッセイによって評価されることが多い。エッセイのテーマ例としては、「あなたの失敗について述べなさい。その失敗はあなたにどのような影響を与えましたか？また何を学びましたか？」（2014 年-2015 年入学者選抜におけるテーマ例）等がある。エッセイには、テーマについて述べつつ、志願者本人のこれまでの経験、そこから学んだこと等を盛り込む。これらの情報によって本人の人間性や教養等を読み取ることができる。さらに、エッセイを通してライティングのスキル等、学力の側面を評価することもできると考えられている。

これらの資料を用いてアドミッションオフィサーが志願者を多面的・総合的に評価しているが、各大学の考えによって重視される資料は異なってくる。例えば、academic achievement を重視する場合は、GPA を重視する。GPA の4年間の推移だけでなく、各高等学校のレベル、その高等学校出身者の大学入学後の成績推移等、蓄積されたデータを用いて丁寧に評価をしていく。その一方で、エッセイを丁寧に読み込むのは、可否のボーダーラインにある志願者のもののみとしたり、エッセイを課さないこともある。逆に大学の考えによっては、エッセイを重視する場合もある。エッセイによってクラス分けを行ったり、多様性を担保した

りするために用いているのである。

どの資料を重視するにしろ、アドミッションオフィサーとリクルーターからキーワードとして挙げられることが多かったのが **personal, holistic** という言葉であった。資料を単純なテスト得点に代わるものとして捉え、機械的に合否決定をしているのではないことがわかる。エッセイ等を課さない場合も、GPA を精査することで背景にある様々な要因を推測したり、メールや電話、SNS 等を活用してつながりを作ったりして、学力的な側面だけではなく、**personal** な側面を評価しているのである。ここから、多面的・総合的な評価を行うために、新しい資料の提出を求め、志願者に負担をかけるのではなく、大学側が既存の資料をうまく活用している現状が見て取れた。

### 3 アメリカ合衆国における高大接続事業

本調査では、都市部にある大学と都市から離れた大学を訪問した。それぞれの地域における高大接続事業の特徴をまとめていく。

#### 3.1 都市部の高大接続事業

都市部の大学では、高校生が実際にキャンパスを訪れるツアーが行われている。その際、ガイドは在學生が務め、必要に応じて教職員も対応している。また、大学が行う公式のツアーだけでなく、保護者と志願者が教員にアポイントメントを取り、大学を訪れ、直接研究や大学について説明を受けるということも日常的に行われていた。実際に大学生活の実態を知るための取り組みが行われていることがわかる。その一方で、SNS やメールも活用され、大学の風景やイベント等が広く発信されていた。

#### 3.2 遠隔地の高大接続事業

都市から離れた地域にある大学では、地理的な問題もあり、基本的には公式なキャンパスツアーやオープンキャンパスのような高校生が直接キャンパスを訪れる取り組みはしていないことが多いようである。その一方で、インターネットやメールを通してリクルーターと高校生が 1 対 1 でつながったり、SNS を積極的に活用したりして広く情報を広めていた。

また、大学から近い場所にある高等学校については、リクルーターが頻繁に訪問を行っている。訪問を行う際にも、ただ訪問するだけでなく、1 度訪問した高等学校には必ず数回訪問したり、訪問した際にカウンセラーと情報交換を行ったりする等、高等学校と密な関係を築いていた。

アメリカ合衆国では、地域に関係なく、リクルーター

が充実していた。リクルーターとアドミッションオフィサーとは密に連携している。リクルーターは、実際に国内外の高等学校を年間 50 校から 60 校訪問するだけでなく、メールや SNS を使ったリクルートや情報提供、高校生だけでなく、保護者や同窓会ともつながる等、精力的な活動を行っていた。

また、**Running Start Program** 等の地域の高校生が大学の講義を継続的に受講し、単位互換を行う取り組みも行われている。

### 4 高等学校における指導

高等学校の指導においても、大学と同様に **personal, holistic** がキーワードとなっていた。卒業へ向けた単位取得も生徒の興味関心、強み、希望に沿って授業を組み立てていく。エッセイについても文法等の指導だけでなく、どのような内容を盛り込んでいくか、教員と生徒が対話し、アイデアを出し合っている。その過程でどのような課外活動を行っているか等、学業以外の面にも注目し、**personal** な側面を盛り込んでいくようである。

また、高等学校によっては大学進学へ向けたサポートも充実させていた。大学のリクルーターを呼んで説明会を行ったり、リクルーターへのインタビューを行う機会を設けていたりする。様々な課外活動に自然に参加することができるようなカリキュラムを組んでいる高等学校もある。その課外活動の記録を入学者選抜の際の書類に活用するのである。

### 5 琉球大学でどのように活かすか

アメリカ合衆国で行なわれている高大接続事業をそのまま琉球大学で実施することは困難である。それは大学入試の制度がアメリカ合衆国と日本では大きく異なっているからである。例えば、アメリカ合衆国の大学では一般的に存在しているアドミッションオフィサーやリクルーターが琉球大学にはいない。そのため、高校生と 1 対 1 でつながることができない。結果として、大勢の志願者といかにつながっていくかを考えていくこととなる。そこで、アメリカ合衆国での調査結果をそのまま活かすのではなく、琉球大学における高大接続事業という文脈の中で、得られた知見をどのように活かせるか考えた。ここからは、琉球大学で行われている、もしくは今後実施していく予定の高大接続事業について、調査で得られた知見との関係性を述べながら紹介していく。

#### 5.1 高大接続改革推進に関するワーキンググループ

高大接続改革推進に関するワーキンググループは、

表1 琉球大学で実施予定の新しい高大接続プログラム

プログラム名	琉球大学説明会	大学進学支援講座	琉大にぬふぁ星講座
ねらい	琉球大学を念頭に置いている生徒に琉球大学での学びや学生生活、入試情報を受験生に提供し、魅力を伝える。	高等学校の生徒の大学への進学意欲を向上させる。	大学進学を目指している高校生に、より高い目標を明確にして努力する生徒を育成する。 にぬふぁ星・・・北極星。沖縄県民にとって人生の目標をイメージする言葉。
主な対象	高校3年生	高校1, 2年生	特定分野を目指す高校1, 2年生
開催時期	5月～6月	通年	長期休暇期間、インターシップ 期間
主な内容	琉球大学での学びと入試の説明。希望に応じて学部教員も学部について説明。	文理選択や、琉球大学に関わらず、広く大学での学びの実態などを説明。	特定の分野（医学系、エンジニア系等）を目指す高校生を対象にして、数日間に渡って実施。

入学者選抜と、その他の高大接続改革の推進に関する事項を調査・検討するために設置された。メンバーは琉球大学アドミッションセンターの教員、各学部の教員、入試課職員と沖縄県教育庁が推薦する高等学校教員となっている。

アメリカ合衆国では、リクルーターは高校に訪問し高校のカウンセラーとの情報交換をおこなっていた。高校の現場でも、大学のリクルーターによる説明会が頻繁に行われるなど、高校と大学が情報交換を行うことができる場があった。琉球大学では、この情報交換と対話の場をワーキンググループという形で提供することとした。実際にこのワーキンググループでは様々な事項について自由に意見交換がなされている。例えば、平成 29 年度開催されたワーキンググループでは、オープンキャンパスの開催方法がテーマの1つとなった。この場での対話を基に、アドミッションセンターではオープンキャンパスの開催方法を見直した。平成 30 年度のオープンキャンパスでは、参加者によりよい情報提供ができるように、イベントの内容とスケジュールを改善することとした。このワーキンググループは平成 30 年度以降も継続し、課題を見つけ、対応策を考え、実行し、検証を続ける予定である。

この高大接続改革推進に関するワーキンググループでは、多面的・総合的評価を行うための対話も実施されている。本報告にあるようなアメリカ合衆国での入学者選抜の実態や先進的に多面的・総合的評価を行っている大学の事例等をセミナー方式で伝え、それを基に対話を行い、高等学校教員が求める評価と大学で実行可能な評価の開発を目指している。

## 5.2 新しい高大接続プログラム

アメリカ合衆国の大学の高大接続事業の大きな特徴は、リクルーターが地域の高等学校に積極的・継続的に出かけるなど、自ら動く態度が見て取れたことである。琉球大学アドミッションセンターでは、地域の高等学校からのニーズを収集し、それを踏まえ、高等学校と積極的・継続的に関わられるような新しい高大接続プログラムを検討し、平成 30 年度より実施する予定である。

### 5.2.1 「琉球大学説明会」「大学進学支援講座」

これまでの大学説明会は琉球大学アドミッションセンター教員、入試課の職員、そして高等学校からの希望があった学部の教員が、沖縄本島の高等学校に出向く形で行われていた。その際、何年生が参加するかは高校側の裁量に任されており、当日になって説明対象がわかることも多く、その結果、生徒・高等学校からの希望と大学が準備したコンテンツがミスマッチを起こすこともあった。この問題点に対応するために、これまでに実施した内容の精査や高大接続改革推進に関するワーキンググループでの対話、アンケートの結果を基に、琉球大学への進学を勧めるだけにとどまらず、大学進学は1つの選択肢であること、それ以外の選択肢も広く存在していることを示す等、幅広いコンテンツを前もって用意し、事前の申込時に参加する生徒のニーズに合わせて高等学校側に選択してもらうこととした。中央教育審議会(2014)においても、高大接続とは、高等学校卒業生に対して大学進学だけでなく、

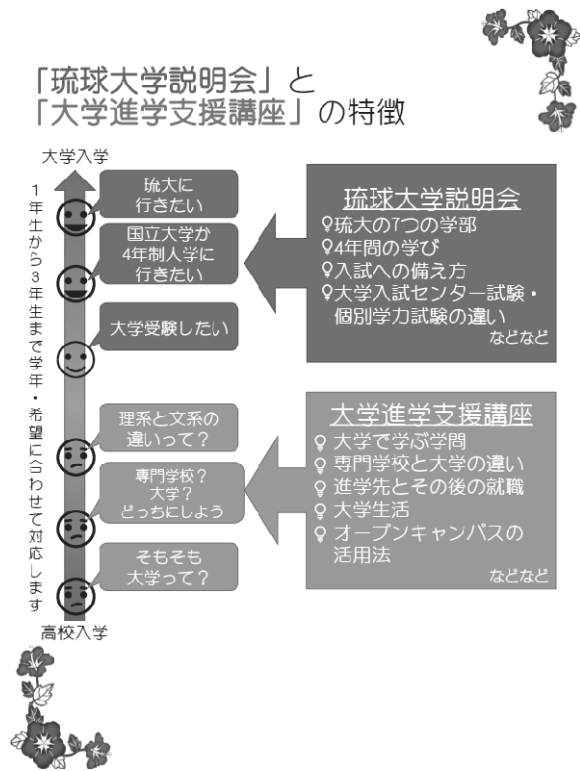


図 1 「琉球大学説明会」と「大学進学支援講座」の高校配布用チラシ

多様な進路においても自立した力を育むという視点の重要性が主張されている。検討の結果実施が決定したのが「琉球大学説明会」と「大学進学支援講座」である(表1)。「琉球大学説明会」と「大学進学支援講座」の違いは図1の通りである。

琉球大学説明会は、琉球大学を第一志望にしている、国立大学を目指している等、ある程度進路の希望が決定しつつある高校3年生を主なターゲットにしている。そのような生徒に対して琉球大学での学びや入試の情報を提供することで琉球大学をよりよく知ってもらおう。また、高校からの希望や進学実績に応じて学部の教員にも協力依頼をし、教育カリキュラムや教員の研究、卒業後の進路等の説明も行う予定である。時期については、志望校が確定してくる夏休み前までとし、具体的には、5月から6月に実施することとした。

一方、大学進学支援講座は卒業後の進路がまだはっきりと決まっていない生徒に対して、大学に進学する意義や大学での学び、学部の選択、大学生活等について情報提供を行う。専門校や進学実績を考慮して、高等学校によっては、特定の学問分野に焦点を当てた内容についての情報提供も考えている。この講座を通して、琉球大学に限らず、広く進学意欲の向上を目指す。この講座は通年実施する予定である。

これまでの琉球大学の大学説明会は、主に沖縄本島にある高等学校で実施されており、沖縄県内の石垣島、宮古島等の離島部には、一部の学部や入試課職員が訪問しているのみであった。また、鹿児島県の与論島・沖永良部島の離島からは毎年志願者が複数名いるにも関わらず、高校訪問等の組織的な対応をする対象としておらず、十分な対応ができていなかった。そこで「琉球大学説明会」と「大学進学支援講座」については、地域の拡大とより組織的な対応も視野に入れ、離島部にも案内を行うこととした。

### 5.2.2 「琉大にぬふぁ星講座」

アメリカ合衆国では、Running Start Program 等、高校生が大学の講義を体験的ではなく、継続的に受講でき取り組みが一般的に行われている。日本においても佐賀大学の「教師へのとびら」(e.g., 西郡ほか, 2017) 等、継続的な活動が行われている。オープンキャンパスの模擬講義や実験等の体験コーナーは人気のあるコンテンツであるが、単発となるため、一時的にしか興味関心を喚起することしかできない可能性がある。そこで、これから大学進学を目指す高校生が自分の目指す学問分野においてより高い目標を掲げ、継続的に努力することができるよう、インターンシップ期間や夏休みを利用した比較的継続的な講座を作成した。これが「琉大にぬふぁ星講座」である(表1)。講座名にある「にぬふぁ星」は「にぬふぁぶし」と読み、沖縄の方言で「北極星」を意味する。にぬふぁ星は沖縄の民謡に歌われており、沖縄県民にとっては人生の目標をイメージする言葉である。

「琉大にぬふぁ星講座」では、エンジニアや医療など、特定の学問分野に焦点を当てて継続的な講座を実施する。エンジニア系では、工学部と沖縄県内の工業高校が協力する。具体的には、県内の工業高校のインターンシップ期間を活用し、参加者(高校生)は希望する研究室の活動や実習に参加する。その参加した結果をレポートにまとめる。学部はその発表会までをサポートする。場合によっては、学部の企業の参加も計画している。現時点で県内の数校の工業高校と工学部との協力が決定している。

次に医療系では、医学部への進学を希望する高校生が夏休み中に参加する予定である。エンジニア系の取り組みと同様に研究室での活動や実習に参加することに加え、遺伝子、臓器移植、再生医療、ガン、認知症等、医療を取り巻く最新トピックについての講義を受ける。講義の中では、医療の基礎的な実験の実施も計画しており、医学部での学びを体験できる仕組みとな

っている。

琉大にぬふぁ星講座では、これらの取り組みを通して、高校生に実際に大学で行われている教育や研究の実態を知ってもらい、将来のキャリアプランを描く上でより具体的な目標を立てるためのサポートを行っていく予定である。

この他にも、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) やスーパーグローバルハイスクール (SGH) を実施している高等学校における探究型学習の指導に対応できる学部教員を派遣する取り組みや、今後実施される新学習指導要領による探究学習を全面的にサポートする取り組みも計画している。

ここまで紹介した取り組みにおいて、アドミッションセンターは実際に講師として高等学校に出向くだけでなく、講座の窓口と高等学校と大学とをつなぐコーディネートを担当する。琉球大学では、これまで高大接続に関わると考えられる窓口が学内に分散していたが、窓口をアドミッションセンターに一本化することによって、高等学校からのアプローチがなるべく容易になるよう考慮した。

### 5.3 その他の取り組みとまとめ

アメリカ合衆国では、高校生とつながりを作る方法として、実際に高校を訪問するだけでなく、メールやSNS、大学のニューズレター等も用いていた。琉球大学アドミッションセンターにおいても、提供する情報の質・ターゲットの意識や居住地によって提供する手段を検討し、効果的に情報提供することを計画している。特に、琉球大学の所在地は沖縄県である。そのため、琉球大学についての情報が他の都道府県の高等学校や高校生に伝わっていないことも多い。また、琉球大学は沖縄県の比較的市街地にあることもあり、県外にある高等学校、県内においても市街地から遠い場所、離島の高等学校とのつながりの作り方を工夫する必要があり、そこで現在、SNS の活用も含め、高等学校や高校生といかにつながりを作っていくかを検討している。

琉球大学アドミッションセンターでは、以上のような取り組みを通じて入学者選抜改革のベースとなるつながりを作っている。今後も沖縄県特有の地理的・文化的な特徴を踏まえつつ、より深く広いつながり作りのために様々な取り組みを実施し、それを踏まえた入学者選抜改革を進めて行く予定である。

### 参考文献

中央教育審議会(2014). 「新しい時代にふさわしい高

大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために—— (答申)」

<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)> (2018年3月10日)

川嶋太津夫・山下仁司・石倉佑季子・井ノ上憲司 (2017). 「多面的・総合的入試の日本モデルの検討——海外事例と日本の文脈を踏まえて——」 『平成29年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第12回) 研究発表予稿集』 独立行政法人大学入試センター, 1-6.

西郡大・竜田徹・山内一祥・福井寿雄・高森裕美子・園田泰正・兒玉浩明 (2017). 「高校3年間を通じた継続・育成型の高大連携活動の取り組み——完成年度を迎えた「教師へのとびら」の効果と課題——」 『平成29年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第12回) 研究発表予稿集』 独立行政法人大学入試センター, 303-309.